

**今月の一言** アメリカ環境省ご自慢の「ゼロエネルギータウン」の見学で、太陽光パネル、電球型蛍光灯と並んで日本製のガス瞬間湯沸器が採用されていました。貯湯槽なし、熱回収で熱ロスが少なく超高効率なきめ手とのこと。日本の「トップランナー方式」の効果を認識した次第です。  
(池澤 広和)

## Topics

- 湯澤上席研究員、近藤研究員が3月6日・7日に東京ビックサイトで開催される「建築・建材展 2008」ワークショップにて、「NEDO 住宅・建築物高効率エネルギーシステム導入促進事業の事業成果」について講演します。
- 2月20日に開催する第2回NSRI都市・環境フォーラムは、村上陽一郎先生(国際基督教大学大学院教授)のご講演「科学・技術と社会」です。詳細は<http://www.1k.mesh.ne.jp/toshikei/>まで。

## 都市の「メタボ」を考える

皆さん、「メタボ」といって何を連想しますか。

今のご時勢なら、ほぼ全員が「メタボリックシンドローム」とお答えになるでしょうが、最近気になっている2つの「メタボ」について、都市との関係を踏まえて記したいと思います。

一つ目の「メタボ」はもちろん「メタボリックシンドローム」です。

実は、この「メタボリックシンドローム」をテーマにしたちょっとした勉強会に参加していることがきっかけで、今のわが国のメタボリックシンドロームを取り巻く環境が、まちづくりの課題や今後の対処方向などに、似た状況にあり、対象が「人体」と「まち・都市」という違いこそあれ、もしかしたら今後の都市づくりについて、いろんなことを発想する上で役に立ちそうな気がしています。

「メタボリックシンドローム」には、様々な解説がありますが、そのひとつに「悪い太り方(内臓脂肪型肥満)が原因で2つ以上の災難(病気)が同時にやってくる可能性が高まる状態を指す」という解説を目にしました。

この解説(概念)により、「太っている=悪・不健康」という単純な図式が薄らいではきましたが、「同時に2つ以上の災難が来る」という脅迫にも似た情報発信によって、脂肪の「質」を厳しい規制と監視を伴う強制的なコントロールにより、体質改善を図り、「健康」を維持・増進することが、極めて日常的なスタイルとして定着する状況になりそうです。

強制的といった理由は、平成20年4月の医療制度改革の一環で、メタボリックシンドロームの概念を取り入れた新しい健診制度(特定健診、保健指導)が始まることを指します。

この背景や経緯を簡単に説明しますと、膨れ上がる医療費等の社会的負担に歯止めをかけることが緊急かつ国民的課題であったことに対して「国民が健康であれば、医療費・介護費等の社会的負担が増加しない社会が実現できる。したがって国民の健康づくりのための施策を強力に推進する。」という非常に分かりやすい方針のもと、平成12年に「健康日本21」という国民の健康維持・増進のための運動が始まりました。

そこでは具体的な数値目標を設定した上で、様々な施策が講じられ、加えて平成15年の健康増進法の成立もこの運動を後押しするものでした。

しかしながら、その後も医療費の増加と因果関係の深い生活習慣病は増え続け、効果が思ったほど顕著にあらわれない。

この状況に対して、厳しいメスを入れるということが、今回の医療制度改革、健康日本21の改訂ということであり、より一次予防(病気にならないための習慣の改善)を重視した対策を強化し、その矛先がメタボリックシンドロームに向けられることになったという次第です。

前置きが長くなりましたが、この状況と経緯を都市づくりと環境との関係になぞらえると、都市づくりは、これまで「生活の豊かさ・便利さ・快適さ」を求めて、ある程度は折り合いをつけながらも結局は「地球の悲鳴」を代償にしつつ進められてきたわけですが、昨今は、強く「地球環境への負荷低減」や「CO2排出削減」を大命題にしつつあります。

すなわち、都市における「環境と共生すること」が、人間という「健康の維持」であり、人間の成長にあたる都市開発が否定されないためには「CO2排出削減」という内臓脂肪型からの脱却を目指した体質改善を都市づくりの目標に設定し、「規制・誘導或いはエリアマネジメント」という保健指導により、施設等だけでなくインフラも含めた環境性能を向上するためのプログラムを築き、都市を環境的側面からも効率的に運営・経営するという捉え方ができるのではないのでしょうか。

ここで重要なことは、健康である(環境共生)のために、すべての成長行為(都市開発等)を抑制するということではなく、良質な体質(脂肪の質、筋肉量、骨密度など)を築きつつ、成長するというところに、活路を見出すということです。

人間と都市の違いは、「死や病気に直結する可能性の高まり」に対する危機意識と臨場感の根本的違いもさることながら、人間の場合は、食事や運動などにより、人体をトータルに改善できること、その改善効果を簡単に計測できることで、健康へのモチベーションを高める正の連鎖を形成しやすいことに対して、都市の場合は、人間という骨や臓器にあたる道路、河川、公園、供給処理施設等のインフラストラクチャーは公共が主体、肉の部分である建物等は民間が主体であり、この両者の改善プログラムを一緒に扱わないと効果がなさそうなこと、長期的な取り組みと強固な目的意識と社会的責務を持ち続けることによって始めて、その効果が見えるであろうことなど、都市を扱うことの複雑さと困難さを感じます。

さて、話は変わって、建築や都市に関わる方なら、「メタボ」と言えば、1960年代の「メタボリズム」運動を思い起こされた方もいるのではないのでしょうか。

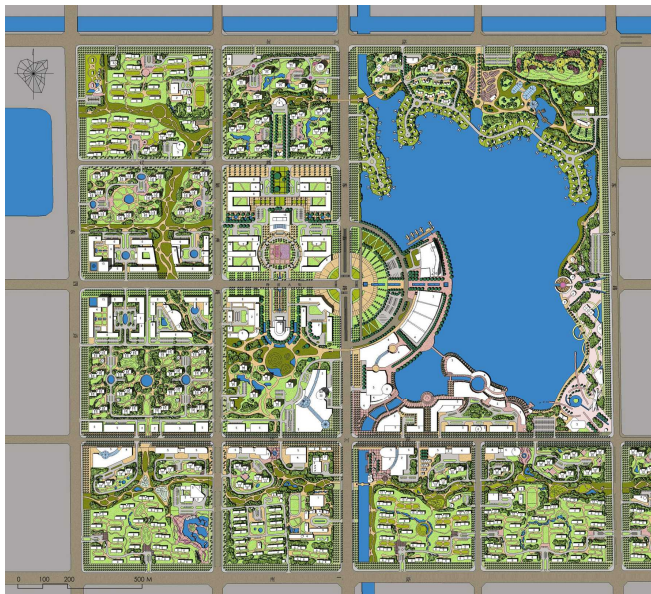
二つ目の「メタボ」は、この「メタボリズム」です。

こちらの「メタボ」は、1960年代当時、都市が拡張する時代の中であって、建築や都市を生命体として捉え、新陳代謝を意味するワードを用いて「社会の変化や人口の成長に合わせて有機的に成長する都市や建築」を提案する理念・思想・活動であり、「西洋の文脈では恒久的な存在であった建築を、可変的なものにしたことが注目を集めた一方、都市における開発と破壊の繰り返しが助長したという批判もある。」と言われる一面もあるようです。

ただ、私の理解としては、このメタボリズム思想の重要な部分は、可変性もさることながら、その可変性を支えるために構築される骨格の部分、都市的に言えば強固かつしなやかなインフラをつくるのが重要であるという部分にこそ、その真意があったのではと捉えています。

しかるに、現在とは時代背景こそ違え、環境の世紀と呼ばれる21世紀のキーワードである「サステナブル」にも通じ、その具体的手法も「スケルトン&インフィル」そのものであるということなど、再評価されるワードになりそうな気がしています。

都市におけるスケルトンは単純に考えれば、道路や公園・緑地等のオープンスペース、供給処理施設などのインフラであり、「都市の安全・安心を支えるもの」。人間の体で置き換えれば、「健康な肉体」といったところでしょうか。



『中国の某開発区マスタープランへの提案』

エコリング: 緑道空間を将来の都市インフラのリザーブ空間として活用する提案



『中国の某空港都市マスタープランへの提案』

風の道づくり: 卓越風をまちに取り込み、水系と組み合わせるまち全体で展開を提案

メタボリックシンドロームとメタボリズムという2つの「メタボ」。今後、地球的な課題として環境と折り合いをつけるという枠組みの中で、新陳代謝を図ることが必須条件になる都市づくり。今のところ、特効薬となる都市の改善プログラムとなる妙案とイメージは持ちえていないのですが、以下のキーワードを頭の片隅において、日常業務に取り組みたいと思っています。

CO2 低減の視点からの都市づくりの一次予防方策と入口のシナリオ・政策（強制発動的な大号令）の必要性  
強固かつしなやかな環境のインフラ（と施設の実現）

\* 掲載した2つの図は実現したものではありませんが、担当した海外業務で提案したものの一部です。

言葉の定義としては、正しくないかもしれませんが、この議論と検討の行き着く先には環境との共生はもとより、都市における社会活動コストの低減と最適化、人々の幸せがあってほしいと思います。

（石川 貴之）

## 定期配信をご希望の方

定期配信を御希望の方は、下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

（chihiro.kimura@nikken.co.jp 担当: 木村千博）

## 編集後記

喜寿の母を連れて房総へお花を摘みに行き、ほかほかな一日をすごした翌日、関東地方は2年ぶりの大雪となりました。ストックやフリージアの香りに包まれながら、窓から雪景色を楽しむ週末を過ごしました。（K）